



節句人形の

『素朴なギモン』コーナー

Vol. 80

三人官女 五人囃子

ひな祭りの季節が近づいてきました。3月3日は上巳で五節句の一つです。江戸時代の頃から、ひな祭りのときに飾られるようになった雛飾り。現在は親王飾りが人気ですが、以前は豪華な七段飾りも人気でした。内裏雛の下に飾られているのが三人官女、五人囃子、隨身です。今回は三人官女と五人囃子について調べました。

の一人が座り姿など、さまざまな形式がある。

中央の人形が鳥台もしくは杯を載せた三方を持ち、向かって右が長柄鉾子、左が加鉾子（提子）を持つのが一般的である。この小道具によって雛飾りがその主役たる男雛女雛の婚儀を表現したことを示している。

中央を鳥台持ちとしたのは関西（京都風）に、三方持ちとしたのは関東に多く、この官女を年長者として表すため、お歯黒や眉を剃り落とした容貌にすることが多い。

官女は白地の小袖または振袖に緋色の長袴を着用する。稀に若い官女の意味で袴を濃色したり、一人を愛嬌のあるお多福や老女仕立てとすることもある。明治以降は中央の一人もしくは全員を袴姿としたものもある。

業界用語では「三官」という。官女の人数は役割の最少人数の三人に定着したが、五人、七人、九人のものなどもある。

五人囃子

三段目に並べる五人囃子は能の地謡と囃子方を表した五体一組の雛飾り用の人形。1831（天保2）年刊行の『宝暦現来集』によれば天明年間（1781～1789）頃、江戸で創作されたという。

実際の舞台では地謡・囃子方を成人男性が務めるため、それを模ったものもあるが、愛らしい童子仕立てが圧倒的に多く、まれに美人仕立としたものもある。

衣装は袴姿のものと素襖姿のものがあり、五人を揃いの

衣装とすることもあれば、あえて色違い、文様違いとすることもある。15人揃いの雛飾りでは中央に位置するため、主役の内裏雛に次いで上質の衣装とするのが業界の通例であった。

関東では地謡に口開き、太鼓に口閉じの頭を使用するが、京都では逆とし、表現が異なる。業界用語では「林」または「素襖」。なお宮廷の様子を表現した雛飾りに、武家の式楽である能はそぐわないとして、雅楽の楽人を配することもあり、これは人数によって五人楽人、七人楽人などと称される。

三人官女

宮廷に仕える女官を表した三人一組の雛飾り用の人形。年代は明確ではないが、江戸後期に出現したとされている。段飾りでは、通常上から二段目に飾られ、全員が立ち姿、全員が座り姿、中央の一人が立ち姿、中央

業界用語では「三官」という。官女の人数は役割の最少人数の三人に定着したが、五人、七人、九人のものなどもある。



三人官女と五人囃子